



森の息吹

No.140 12月号
2017.11.26 発行
編集代表：五賀利雄
0133-26-3738

11月の活動報告 協働の森は懇談会で今季終了。記念植樹の冬囲いなど

11月5日(日) 「弁華別協働の森」懇談会と学習会 参加者8名 天候 曇り

1、今年度の活動について メモしたものを羅列します

植樹方法については様々な実験と検証を繰り返すことでよりよい方法がわかってくるのではないかと。自然のままに育てよう。保育をしなくても積雪の中でどの程度育つのかを実験する自然界では秋に種が落ちるので種子の秋まきは自然である3年計画の事業を考慮しこんな森をつくりたい…。3年後の姿を思い浮かべよう



2、来年度の活動への意見

枝打など育樹作業や笹払いを行い散策路をつくる。

森づくりの期間は長期であり助成金で行える3年間は短くその先が不透明である具体的な活動としてはキノコの植菌、炭焼き、安全講習会(チェーンソー含む)除伐、間伐などのプロの講師の講習、指導を受けたい 「山里」とは…

3、山菜リスト作成の確認をしました 4、学習会では種子のでき方と進化について学びました

11月12日(日) 10周年記念植樹の冬囲いと備品のチェック 参加者6名

当別ダム下の親水公園に植樹した桜の冬囲いを行いました。枝をたたみ縄で縛る作業は簡単に終了しました。

その後、山田倉庫で備品のチェックを行い、かかり木を取り除く道具などをあらためて発見しました。

久しぶりの昼食タイムでは桜田氏から提供されたきのこ汁を食べながら以下の話をしました

- 1、払い機とチェーンソーのメンテナンスを業者に依頼する
- 2、シイタケの原木作りを会独自でも行ってはどうかとの意見。

山田山林で2月下旬に原木を取る 菌は購入する。

- 3、オイル、工具箱を購入する。 4、講師を頼みかかり木などの講習会を開く

- 5、ユニホームを作成する チョッキタイプ(涼しい、軽い)で背中にシラカンバの文字などなど、来期に向けての意見や必要物品の購入計画を話し合いました



12月の活動案内

12月3日(日)

内容 今年度の反省会と来年度の活動に対する意見交換会
忘年会を兼ねています **昼食を用意します**

場所 スターライト会館 当別町太美スターライト1512-26

時間 13:00から終了は17:00を予定しています

参加の有無 準備の都合上12月1日までに班長に連絡をお願いします

※ アルコールが提供されますので飲酒する方の車の運転はご遠慮ください



リレーコラム

～思い出の里山～

五賀 利雄

私が子供のころの里山は常に恰好の遊び場でもあった。
紅葉も終わり、ちょうど今頃の季節、落ち葉が降り積もった林の中は
明るい光が満ち溢れていた。

そんな麓の傾斜地は目ざといチビツ子集団によって忽ち天然の
ポプスレー場と化したのである。

近くに、戦後旧陸軍が残した飛行場に、高さ10メートルほどの
3方を土手に囲まれた射撃場があった。

このあたり一帯をテリトリーとする我が連隊はこれを戦利品と心得
基地とし日頃は橋滑りの訓練場として引き継いでいた。

難を言えば滑降距離の足りなさだがそれぞれ手作りの橋を持ちよって芝に合った秘密のワ
ックスで技を競い合ったものである。

枯葉の敷き詰められたロングコースが完成するこの季節は、チビツ子集団にとって待ちに
待った遠征の時季到来である。木立の間を縫うように、少々の擦り傷ぐらいは想定のうち、
日の暮れるまで遊び転げた日々が今でも目に浮かんでくる。

童謡「ふるさと」の世界がそこにはあった。モリアオガエルの産卵する池、水面に
張り出した枝先の大きな泡の中から産み落とされるオタマジャクシを待ち受けてイモリが群
がっていた。以来、私はアンチイモリになった。

少子化と時代の流れと共に、子供たちの遊びもすっかり様変わり
している。

広場や空き地から、子供たちの元気な声が聞かれなくなって
久しい。

当然、思い出の里山も同様であるが、唯一つ大きく異なるのが
6年前に起きた原発事故に見舞われた地帯であることだ。

今は、広場も空地も累々と続く黒い袋に覆われ尽くされている。

あの日、目にした腹の赤いイモリに似ているが思いはその比ではない。



木に触れて
林で遊び
森と育つ

編集後記

先日、帰郷もかねて神戸マラソンを走ってきました。神戸の街を走るのは8年ぶりです。

どの場所も思い出深く早く走るにはあまりにももったいなく制限時間の7時間をフルに使い

写真撮影に興じながらほぼ観光ランニング状態で走り切りました。

冬場は雪に閉ざされる北海道とは違い関西などはこれからがランニング
シーズンです。旧友との飲み会では来年は共にマラソンを走ろうと大いに
盛り上がるのでした。

そして、5日間の楽しい旅を終え、帰ってみるとまさかの大雪に

何もかも埋まっており冬の北海道生活満喫だと喜ぶのでありました。

記 岡田

